

第 12 回関関同立戦

3 回生 西原優作

第 12 回の大会となる関関同立戦に、3 回生で参加資格ギリギリながら出場して参りました。

周回速度形式の競技会への出場は今回が初めてで、準備段階から苦難を伴う事ばかりでした。地図の作成に始まり、大会規定の読み込みや、GPS の使い方は英語の取扱説明書を読んで勉強しました。中でも私が苦戦したのはウェザブリで用いるエマグラムの読み方と作成方法でした。それらへの苦戦具合は今まで勉強してなかったのが丸わかりでしたし、大会が終わった今となってはそれらの知識が必ず必要であり有用であったと身に染みて実感しています。

今回の出場は大会規定に記載されている出場資格を満たし、かつ監督からのチェックを通して初めて叶うものでしたが、この監督チェックも正直なところお情けで可を貰った様な有様でした。全て後手に回ってから有難みを知るという学習としては最大に非効率な結果になりましたが、これらの経験は貴重でした。

10 月 26 日 競技 1 日目

さて 1 週間の競技の様態です。まずは初日、この日は朝から弱背風が吹いていて、ピス交が予想されていました。当初の規定では南向き発航は行わない予定でしたが、その日は条件が予想されていたため協議の結果ピス交をして競技続行という判断になりました。

選手は 4 回生井上さん、松本さんを主力に 3 回生の私と竹葉、2 回生の三木が続く今大会のフルメンバーでした。この時点では私は主力が揃うこの日こそ大会結果を左右する節目だと捉えており、私自身は主力が得点できるように偵察に力を入れるつもりでした。

条件が発達してきた昼過ぎ、各大学徐々に滞空する選手が出始め、誰が最初に旋回点へトライするかハラハラした雰囲気でした。同志社も主力を積極的に送り出し得点を狙いましたが、井上さんも滞空点を得るに止まっていました。そんな条件下、次は私が行くと言って ASK13 で飛び立った松本さんが、他の選手も探りを入れていたサーマルを上手く掴み上昇。どんどん高度を上げて第一旋回点へアタックをかけた時には同志社チームのみならず地上全員が沸き立ちました。このフライトは 1 ポイントクリアに終わりましたが、結局この日旋回点を回ったのは松本さんだけで、あとに続いた三木の滞空点も相まって他のチームにリードをすることができたのです。

10 月 27 日 競技 2 日目

この日は井上さんを欠いた 4 人での戦いでした。昨日リードを作ったとはいえ、タスクコンプリートされては一撃で逆転されてしまいます。油断はできません。

この日もランウェイを南向きにチェンジしての競技でした。競技が動いたのはやはり昼頃でした。あらゆる選手がサーマルの存在は感じながらも掴み切れずに帰ってくる中、関大の選手だけが長く滞空しつつ高度を上げてはトライを繰り返し、達成しきれずに元のサーマルに避難するようなことを繰り返していたのです。

同志社も松本さんを筆頭に何とかサーマルを掴むべく選手をしきりに送り出しましたが、どれも実を結ばず苦闘していました。何度かのフライトが偵察に終わり、チーム内に疲弊が見え始めたころ、私が次の同志社のフライトを飛ばすことになりました。関大が長く滞空しているサーマルには離

脱から迷わず向かわなければ届きません。チャンスは1回しかないものと腹に決めASK13で飛び上がりました。しかし予想外、離脱後すぐの地点に上昇帯があったのです。これは僥倖と乗ったそのサーマルは私を素早く放り上げるほどの強さを持ち、私は短時間で関大と同じ高度へ到達しました。さらに高度は上がり続け900mに達しました。この時まで、私は周回のもとより、滞空・サーマリングも片手で数えるほどしか経験していませんでした。おそらく後ろの教官からはチグハグで非効率な操縦に見えたでしょう。しかし1000mにも達しそうな高度をもはや得てしまっただけはチャレンジしなくてはなりません。私はいつの間にか関大の選手の高度も抜いて、ついに旋回点へむけてアタックをしました。旋回点を回る高度は指定高度を大きく上回っていたのでその点は心配ありませんでしたが、上手くセクターを回れているか不安でした。私は2回旋回点を回りました。初めの旋回点を回った時点で高度はまだあったので、そのまま次の旋回点に向けて進路を取りましたが、ここで沈下に叩かれてしまいました。脱出はしたものの次のサーマルを上手く掴み切れず、結局そのあと何分かがいた末に着陸しました。私がかかっている間に関大も同じく1ポイントクリアを達成していましたが、彼も次の旋回点には届かず帰ってきました。

喜んでいるのも束の間、私の着陸から少し後に飛び立った立命館が恐るべきフライトをしたのです。その選手も順調に高度を上げると難なく最初の旋回点をクリアして、勢いそのままに次の旋回点へトライを開始しました。向かう道すがら何度か高度を上げなおす旋回を行ったもののあくまで順調に目標地点までたどり着くと第2旋回点をク

リアして、そのままゴールまでたどり着きました。タスクコンプリートです！私たちは一気に逆転されました。戦慄している私たちとは対照的に、立命館は何やら深刻な顔つきで話をしていました。聞いてみると、フライトの途中でGPSの電源が落ちたようでした。充電が上手くできていなかったようです。

この日関大はもう一人1ポイント達成者を作り、同志社はまたも三木が滞空点を加算しました。この日のGPSデータの確認は緊張感がありました。私や関大の選手たちのフライトは問題なくセクターを通過し、期待通りに点数を得られました。安堵です。問題の立命館のフライトですが、やはりデータは途切れており、無効と判断されました。また予備に搭載していたGPSも上手くデータを出力できず、立命館はついにこのフライトを証明できませんでした。規定に基づき当フライトは滞空点のみを計算し、周回得点はつきません。同志社目線でいうとこのとき同志社は相手の不備により救われたのです。私はここでも準備の周到さというのは大事であると実感したのです。

関大に大きな得点が入ったものの、この日も三木の滞空点のおかげで首位を守ることができました。

10月28日 競技3日目

この日が私と竹葉にとっての山場となりました。昨夜、主力の松本さんと、今までコンスタントに得点をしていた三木が帰ってしまったのです。主力を欠き、選手は二人だけという状況で戦わなければならないのでした。今日をうまく乗り切ることが今後の肝であると、私たちは覚悟を決めました。

この日は1日通してピス交は行われず、また条件も見込めるだろうとの予想でした。

予想通り風は安定し、9時半ごろから徐々に上昇風を伴っていきそうな雲が現れ始め競技を開始しました。二人で偵察したところいくつかのサーマルポイントを見つけたので、お互いに意見は密に交換し、果敢にサーマルを掴むべく何度も挑んでいきました。しかし、お互いにかすりはするもののイマイチ乗り切れません。この間にも他の大学には滞空を決める者も出てきました。小さなサーマルに乗り切れないというのが周回競技ド素人の二人の弱点だったのです。竹葉が小さな滞空をなんとか決めましたが、やはり高度を稼いでの周回はかないませんでした。私たちは、相談をしてしばらくは様子見を行い、フライトを控えることにしました。

次のチャンスが回ってきたのは14時半ごろでした。雲が切れて日射が戻ってきたのです。この時から各チーム奮って飛び立っていきました。同志社からは私が飛びました。

私の順番が回っていたとき、上空にはすでに2つのチームが高度を上げていました。私も彼らに続くべく離脱後進路をそちらに向けるとまたしても僥倖。離脱地点付近からランウェイと平行に伸びるサーマルラインがあったのです。それは昨日私が掴んだものよりも更に強い上昇帯で、完全に掴むとバリオを振り切る勢いでした。この力を借りて速やかに1000mまで高度を上げると最初の目標に向けて私はトライしました。道の途中、大きな沈下帯がありました。他の機体もこの見えない壁に苦戦しているようでした。私はこの沈下帯を避けて迂回しながら目標へ向かいました。あるところで沈下は収まり、もともと高度も沢山あつ

たのでそのまま旋回点を回りました。また私は2回旋回点を回りました。このまま次の旋回点を狙うべく次の進路へ向かいましたが、旋回点をやや手前にまたしても大きな沈下の壁が立ちはだかりました。移動に大きく高度を使っていたのでそのまま突っ切ることは叶わず、私はまた付近のサーマルで高度を稼ぐことになりました。私が高度を上げるべく奮闘している間に、立命館も初めの旋回点をクリアしていきました。しかし彼もまた私と同じ壁に当たったようでした。私は何度も高度を上げましたが、徐々に風は強くなり次の旋回点への道は遠くなっていきました。サーマルも私が飛び出したころに持っていた勢いをすでに失い、ついに次の旋回点へ届くことなく着陸しました。着陸直後、教官から話をきいたところ、最初の旋回点も次のところもコースをちゃんと見極めていればもっとスムーズに回れたかもしれないとのことでした。またしても私の経験や知識の不足のために大量得点の期を逃してしまった様です。この後、立命館も1ポイントクリアで着陸。関学や関大も同じく1ポイントまでは漕ぎ着けたものの次に届くことなく降りてきました。この日のポイントクリアは各チームから一人ずつとなりました。

この日のGPSデータ確認もまた波乱でした。得点者の一部に空域違反の可能性があったのです。私のデータはこの問題は抵触することなくフライトしたことを示し、私は期待通りの点数を得ました。私の後に確認した関大と関学のデータには空域違反が読み取れ、両チームは減点を受けました。また立命館は今日こそ電池は持ちこたえたもののGPSの設定に不備が見つかりこれもまた減点。結局同じ得点をしていたものの、この日は減点の有無により点差が開き同志社は山場を乗り切ること

ができたのでした。

10月29日 競技4日目

この日も私たちにとってまだ険しい日であることに変わりはありませんでした。再び三木を選手に加えたもののやはり3人とも経験値が低いことは否めません。今日の天気は昨日と概ね同じでした。やはり朝から北向き発航で安定し、条件を期待させる日射もありました。

この日は早い段階から動きがありました。10時前頃に競技を開始して早々、多くの選手が何らかの滞空を始めました。あるいは周回も狙えそうな競技フライトの同志社からの一番手は三木でした。昨日私が上がった場所や、他の選手の挙動をよく相談し三木を送り出しました。三木は離脱するとやはり昨日の私と同じ場所にサーマルを見出したらしく、目に見えて順調に高度を上げていきました。すでに上空には立命館が高く高度を上げていて、いつトライを始めるかを見守る状態でした。そこへ追いすがる三木の機体は短時間で立命館の高度と並んだように見えました。旋回点前に存在する沈下の壁を攻めあぐねているのか、なかなか旋回点へ出発しない立命館を尻目に三木は先に進路を旋回点へ向けました。ラジオから余裕の高度で旋回点の通過を報告する三木の声の流れ、地上は盛り上がりを見せました。しかしその後も昨日の私と同じく次の旋回点に到達することなく帰還しました。しかしこの得点により、他の大学にプレッシャーはかけられたはずでした。

その後しばらくは周回得点者が現れず、幾人かの滞空得点者がいたばかりでした。

しかしこの間も三木と同じタイミングで飛んでいた立命の選手は諦めることなくまだ粘り続けて

いたのです。そしてついに彼は高度を十分に獲得し旋回点を目指し始めたのです。またも地上は沸き立ちました。この高度なら余裕で回ってくるだろうと誰もが予想した中、その選手は予想外の動きをしました。旋回点を逆から回ったのです。この行動は当飛行失格が規定されています。データが確認されるまで不確定ではありますが、立命館はまたも幻の得点を作り上げたのです。

この日のビッグウェーブは午後になるころには収まり、立命館の別の選手が果敢に1ポイントをもぎ取ったほか（これは正しく回れている）、あとの選手は竹葉を始め滞空点のみの得点となりました。競技終了後のデータ確認では三木のフライトに問題はなく、期待通りの得点をしました。問題の立命館の逆回りフライトもやはりばっちり記録されており無効、そのあとの1ポイントクリアは問題なく、今日の周回得点者は同志社と立命館から一人ずつという結果になりました。結果この日私は得点できませんでしたが、三木の1ポと竹葉の滞空によりまだ首位を存続することができたのでした。

10月30日 競技5日目

この日が競技最終日でした。帰っていた我らがエース井上さんを今や遅しと迎え入れ、ラストスパートをかけるつもりでしたがこの日は1日中曇りでした。空も穏やかなもので滞空さえ厳しい条件下でした。

私たちも何度か小さなサーマルを見つけましたが、やはり滞空点を得られるほど乗り切れず、結局最後まで他の大学含めて誰一人得点者は現れませんでした。そして昨日の順位がそのまま最終結果となりました。

今年の関関同立戦も何とか優勝をすることができました。特に私なんか個人優勝してしまってひと際驚いています。

経験豊富な先輩・牽引役がいない時にこそ得点を重ねられたこと、そして多くの選手に減点や飛行失格の処置が下される中、同志社チームは一つも減点を受けなかったことを誇りに思っています。しかし結果は華やかですが、内容はまだまだ粗削りであるのが否めません。他のチームの減点によって常に首位を守っていられましたが、例えば2日目の立命館の幻のタスクコンプリートが実現していたら、私たちは負けています。減点を受けないような準備や知識も含めてグライダー競技だと言われればそうなのですが、私は今以上の得点する力が必要であることを痛感しました。私や三木のフライトにはやはり改善する余地はいくらでもあり、より高得点を狙えるものでした。

この経験は私にとって大いに刺激になりました。また、次の競技会へ向けて自分の準備することもそうですが、次の代に教えるべきことも明確化できたと思います。今回の競技会、私は得た結果よりも次につながる足掛かりを見つけられたことこそ貴重なものであったと思っています。

余談。このとき貰ったトロフィーは現在ひと際存在感を放ちながら私の部屋に安置されています。